

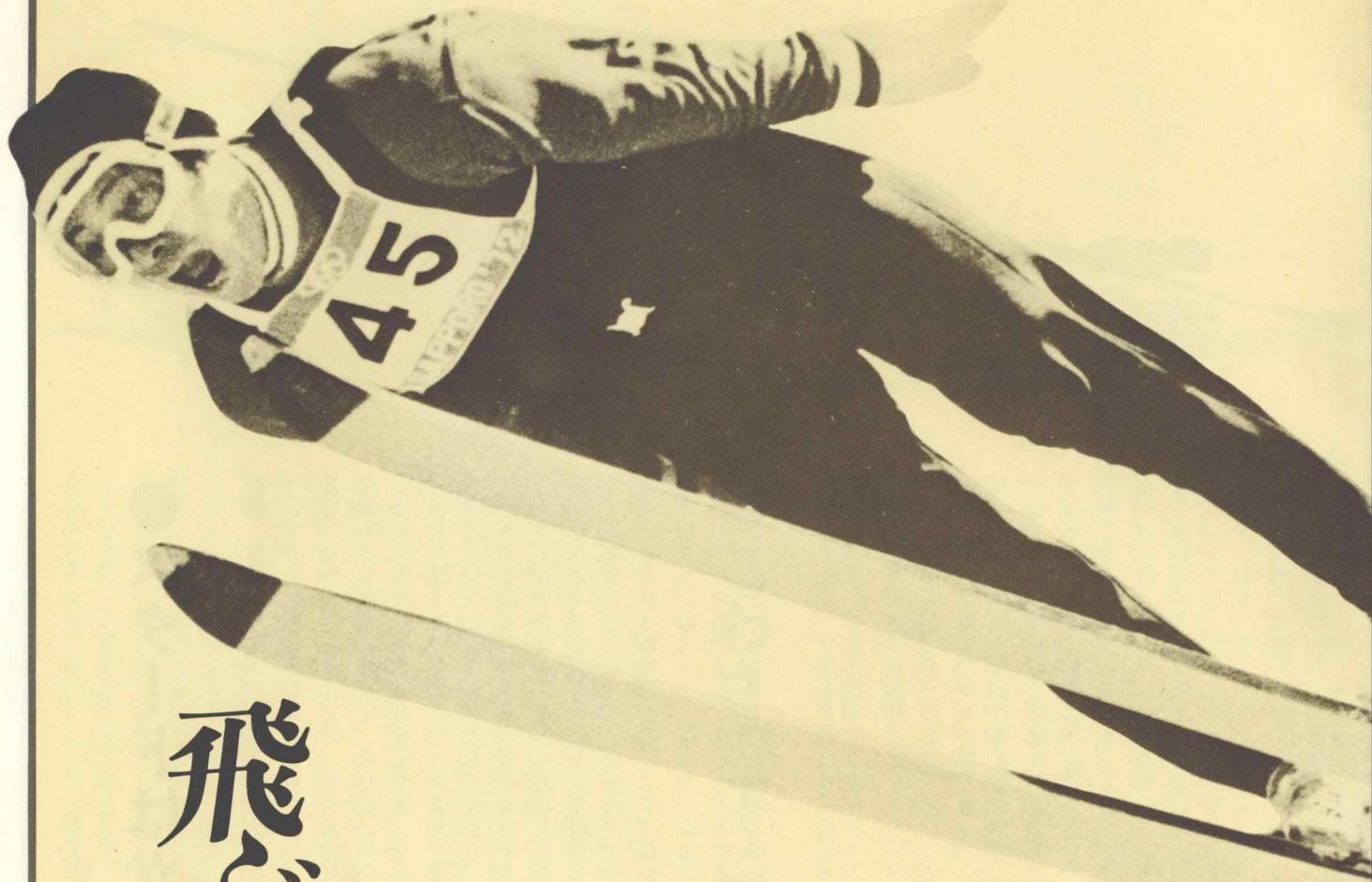
リコー三愛グループ会誌 San-ai

1975 OCTOBER No. 79

特集●人間教育を考える
記録に挑戦する人シリーズ●笠谷幸生
カラー●女子社員の制服



飛ぶ



笠谷幸生

記録に挑戦する人シリーズ……③

笠谷さんは「飛ぶ人」である。話題は、飛ぶことに終始した。その話の中から、仕事や人間関係などの中の「飛」の意味を感じるか、一瞬に賭ける努力を読みとるか、それは読者の自由である。

（記録）笠谷幸生の名がスキージャンプの仲間うちで話題になるようになったのは、彼が余市高校一年生のときである。このとき全日本級のジャンプ大会で三位に入り、すでに高名のジャンパーであった九歳ちがいの実兄昌生氏（後のオリンピック・コーチ）を四位に蹴落としたところからである。

明大へ進んでからの活躍は一般スポーツファンにもよく知られるようになつた。昭和三九年、四〇年の全日本に二連勝、四一年にはユーバニアード大会で優勝した。

カサヤの名を国際的に不動にしたのは四年のシャロッテンブルク（スウェーデン）の大會で、六八・五〇m、七〇・五〇mを出し二三二・八点の高得点で優勝してからで、「あのとき以来、幸生のジャンプは急速な進歩をみせた」と兄の昌生コーチも語っている。

四五年の札幌・大倉山で行われたNHK国際大会の九〇m級は一二・五〇mの国内最長不倒をマークしそれから連戦連勝、A級五大会のタイトルを独占した。この時期から四年三月ノルウェーのホルメンコーレンの大會、四七年二月の札幌オリンピックへかけてが、彼の一つのピークの時代であったといえよう。

だがこの時期に彼は、ホルメンコーレンではいわゆる「ホームタウン・デジション」（地元有利の判定）に泣かされてもいる。

スキのジャンプ競技は、飛距離と飛型の両方を点数に換算して順位が決まる。飛距離のほうはTP点を基準六〇点として一mごとに一定の点数を増減するのであるから簡単明瞭であるが、飛型のほうは、力、大胆さ、安定、という三大要素を審判員が個人の判定で

採点するのであるから、人によつて主觀のちがいもあり得るわけである。

ホルメンコーレンで笠谷は飛距離で地元のモルクを二・五mも上回っていた。しかし、モルクで笠谷は七〇m級ジャンプに八四・七九mを飛び二四・四点を獲得して優勝した。

それから一年、四七年二月六日、第一回冬季オリンピックの四日目、札幌・宮の森のヤンツェで笠谷は七〇m級ジャンプに八四・七九mを飛び二四・四点を獲得して優勝した。これは名実ともに世界のトップに躍り出た。これは笠谷選手にとっての最高の記録であつたばかりでなく、日本にとつても、冬季オリンピックに第二回以来参加して四〇年目に初めてメイントーナメントに日本丸をあげた栄光の記録でもある。

戦い終つたとき笠谷のどころへかけよつて彼を肩車にのせて祝福したのはホルメンコーレンの勝者モルクであった。モルクは日本トヨタにつづく四位の成績であつた。ホルメンコーレンのいきさつを知るも知らぬも大観衆はスポーツマンの友情の美しいシーンに感動した。ホームタウン・デジションなど所詮選手自身は関知しないことである。

ジャンパー笠谷の大きな特徴は、サッツ踏切りの力強さと、研究しつくされた飛行中の姿勢、冷静で思つきのよい試合度胸といわれる。神経質といわれるが、科学的な「さわやかさ」の感じのほうがむしろ強い。来年二月四日からインスブルックで第一回の冬季オリンピックが開かれる。日本のジャンプ陣はまだまだ彼に期待するところが大きい。

●スタートはからつぽの頭で

斎藤 笠谷さんは、どういうきっかけでジャンプをはじめられたんですか。

笠谷 私の育ったところが、うちの会社の工場のある余市の隣村で、今は町になりましたが仁木というところなんです。そのへんは雪が深くて、冬になつたらスキーなしではどうにもならないところですから、自然とみんな滑るんですね。雪がありすぎてスケートはできません。いちばん最初にいたスキーはなにしろ二十八年前のことですからなんにもなくて、父が持っていた四尺五寸という軍隊用のものです。幅が広くて、はくというより乗つかるという感じでしたね。まあ、そんなことで、ごく小さなときからスキーには親しんでいたんです。

笠谷 高校にはいつて全国試合に出るようになつてからですね。

千葉 笠谷さんにお会いしたら、ぜひお聞きしたかったんですけど、スタートする瞬間って、どんな気持ちでいるものなんですか？

笠谷 そうですねえ。スタートのときっていうのは、頭の中にはなんにもないほうが多いんです。ばかになつて体に任せてしまふ。あんまり皆さんにはおすすめできない状態です（笑い）。頭のなかに、なにかやつてやろうという気持ちがあると、ブレーキ

がかかるしまつて体がよく動かない。そこがいちばんむずかしいですね。

大田 いわゆる無念無想ってやつですね。そういう心境には、わりと簡単になれるものなんですか？

笠谷 いや、なかなかできませんよ。コンディションがわるいときは、これまでコンディションがわるくて失敗したときのことを見つてしましますし、いい条件のときには、ここでひとつ、いい成績で勝つてやろうとか、どうしても思つてしましますから。

大田 あ、勝とうと思つちやいけないんで

●女性だつてとべますよ

斎藤 それで、ジャンプのほうへ進んだのは？

笠谷 直接のきっかけは、兄がジャンプをやつていたことです。ただし、もし、リフトなんかの完備したゲレンデで滑つていたら、ジャンプをするようにならなかつたでしょうね。ともかく交通の不便なところで、近くにはりっぱなスキー場なんかない。裏山で滑るほかないんです。一人か二人で、山の中で滑つていたつて、あきちやいますよ。自然とジャンプのまねでもしたくなります。ただし、尻もちジャンプですがね。（笑い）

大田 ジャンプを本格的に始めたのは、いつもからですか？

佐考 笠谷さんのことなんか見てると、正直いって女と生まれたことが、とつてもくやしいのね（笑い）。私もスキー買ってもらつて三度目くらいのときには、じやんぱのまねしたらスキー折つちやつて…。とてもいいスキーだつたんですよ。それでそれつきり。いまだに男に生まれてたらよかつたのにと思うことがあります。

できる安全な競技だということを立証してくれたわけですね。

千葉 安全といつても、写真やテレビでみると、山まで足の下に見えちゃつて、こわいだらうなあと思うんですけど、そう、恐怖感つていうのはないんですか？

笠谷 ええ、そうは感じませんね。

大田 どういう感じなんでしょうねえ、最初に空をとんだときつていうのは。屋根から落ちたり、階段から落ちたりするのとは違つてしまつし…。ぼくは屋根から落ちたことはありますけど（笑い）。いい気持ちのものなんですか？

笠谷 とんでもる瞬間つていうのは、いい気

持ちとか、そういうんじゃないですね。そんなんにこわくもないかわりに……。野球でホームラン打つても、打った瞬間は気持ちがいいもわるいもないでしょ。いいのは玉がはいったときですよ。ジャンプも同じで、じょうずにとべたあとは、たしかに気分いいですね。

野外の競技で、風とか、雪とか、いろんな悪条件の中でやるわけですから、それを乗りこえてとんだぞという安堵感ですかね。マラソンなんかを感じる充実感といふのと、ちょっと違うようです。まあ、いまだに印象に強く残っているのは、失敗したときのことのほうです。

斎藤 自分で完全に納得できたジャンプっ

ていうのはあるものですか？

笠谷 や、それができたら、もうやめて

ますよ(笑い)。

大田 とぶ前の不安感つてものはないんで

しようか？

笠谷 (小さな声で) それはありますよ。

最初は、自分の技術が未熟なことからくる不安、それから、こわいもの知らずの時期をへて、もつとやつていると経験をしきて、また不安を感じてくるつていうことがありますね。

大田 そのところ、もう少し、くわしく話していただけませんか。

佐考

スタートしたけどうまくいかなくて、

戻りたいと思うことなんか、あります？

笠谷 あ、それは何度もありましたよ。でもスタートしたら戻るわけにはいかない。

コースはせまいですし(笑い)。

大田 一度とんで、また階段を上がつてくるときの表情をテレビで見ると、なんか反省しながら登つてくるように見えますね。

笠谷 体がなかなか言うことを聞いてくれませんので、体に言い聞かせながら登つてくるわけですよ。しかし、台に登つてしまえば、もう、呼吸を合わせてスタートするだけ。あとはとんで、落ちての結果待ちです。とび出してからどうしよう、こうしようと考へてみてもだめ。それ以前の問題ですね。

くとべたんです(笑い)。その当時は、体のコンディションはすごくいいのに、意識面が強すぎて力が出せずにいたんですね、きっと。それが二日酔いのもうろう状態で、余計な緊張がとれて、すなおに力を出せたんでしょ。いまそんなまねをしたら、またたくだめでしょうね。

●とぶときは空気にはさまつて

泳選手が全然泳げなくなつたような感じで、

どうにもならないときがあるんですね。全く空気にはさまれたようになれないときです。

斎藤 空気にはさまれる？ どういうことですか、それ……。

千葉 自分では、あまり自信がなかつたのにも、たしかにありますね。そういうときは、いい記録ができます。ただし、コンスタントにはなかなかいきませんね。

笠谷 こわいもの知らずっていうのは、ひととおり慣れて、自信ができる、体まかせでとべる時期ですね。ところが、そのうちに、体が何度か危険な場面を経験していくと、自分の意志に反して体が危険信号を出しちゃつてうまくいかないときが出てきます。

千葉 全然、こわくない時期っていうのも、たしかにありますね。そういうときは、いい記録ができます。ただ、コンスタントにはなかなかいきませんね。

笠谷 というわけでもないですが、学生時代に、試合の前の晩、友達とのみ歩いちやつて二日酔いのままジャンプ台にあがつたことがありますね。そしたら、意外とよ

今まで、最初のころとは、また違ったこわさというのを感じておられるわけでしょうか。

斎藤 こわさがあつて自分が出てくるんで、こわいからできないと、いうのじやないかと

いう感じでやつてきました。それでも、風の強い日なんかにとんでとび終わると、ああ、これより練習の三十べんもやつたほうがらくだなと思うことはありますよ。

笠谷 スタートしたけどうまくいかなくて、戻りたいと思うことなんか、あります？

佐考 スタートしたら戻るわけにはいかない。

笠谷 あ、それは何度もありましたよ。でも

コースはせまいですし(笑い)。

大田 一度とんで、また階段を上がり

るときの表情をテレビで見ると、なんか反

省しながら登つてくるように見えますね。

笠谷 体がなかなか言ふことを聞いてくれませんので、体に言い聞かせながら登つてくるわけですよ。しかし、台に登つてしまえば、もう、呼吸を合わせてスタートするだけ。あとはとんで、落ちての結果待ちです。とび出してからどうしよう、こうしようと考えてみてもだめ。それ以前の問題ですね。



卷之三

笠谷 空気にはさまるんですよ。空気にさからつたら、なかなかうまく落ちていけませんから、じょうずに体の角度をかえまして、空気にはさまれながら時速九〇キ。ぐらいのスピードの中を落ちていくんです。

抵抗にぶつかって落ちてしまうか、それとも体を伸ばした姿勢で空気によまくはさまつていくかそこがうまいとへたとの境です。体を伸ばすと、すばめていたバラシユートを開いたようなもので、かなりのショックを受ける、その抵抗となるべく少なくしながら体を伸ばすのが最高の技術のひとつなんですね。そこで初速を落とさず、空気にはさまった状態でそのままいくと距離が出る

降ったばかりの雪は滑りませんから助走のスピードが出ない。着地点の滑りもわるくなつて、つまり転んだりしやすいんです。そういう悪条件で、スタートのときは、わざあ、こりやだめだなど思つたときは、まず失敗しますね。

そんなときは、失敗してもともとつていう気持ちでとぶと、三度に一度はうまくいきますが…。

● 固定した型ではとべない

大田 こういうふうにとほおつていう計算を自分で立ててとぶんじやないんですか。

は写し方による目の錯覚で、全部が降下の過程ですよ。

つと風圧がきます。
その風圧の中で、
しゃがんだ状態
から大きく体

伸ばすん
です。そこ
で空氣

斎藤 風とか雪とかは、ずいぶん影響する
ものなんですか？

まろうとするときに、それ以外の方向から
の風を受けるとバランスが崩されて、
ひどくやりにくいですね。ルールで
は五十分以上の風があれば競技は中
止となっていますが、相手が風
ですからね、いつ吹き出す

かりません。それ
から雪が降ると

笠谷 あ、あれはね、違うんです。上へあがつていいくよう見えるのですから、これからジャンプをやろうかと思つてゐる人は、おそれをおしちやうんですが。

大田 実際はどうなんですか？

笠谷 スタートしてから着地まで、上に向くということはまったくありません。あれ

笠谷 もちろん、だれだれのフォームはこんなふうだつていうかたちはありますね。でもそれは、人それぞれに顔だちがあるようなもので、ちょっとみたら同じようになると、一回一回、全部違うんですよ。そのへんは、テレビで見ていたのでは残念

笠谷 そういう型ができればいいんでしようがねえ（笑う）。人間の体っていうのは、なかなか頭で思うとおりには動いてくれないんです。瞬間瞬間の理想的な型を考えて、それをつないでいけばいいという理屈になりますが、全体が連続した流れになります。から、そういうぐあいにはいかないんです。

千葉 でも、私たちがテレビで見てても、

千葉
瞬間、
ぐーと体が上にあがっていきます

から、そういうぐあいにはいかないんです。
千葉 でも、私たちがテレビで見てても、
選手の一人ひとりに、それぞれの望みがある

えませんが。

北欧での試合となるとすごいですよ。何万人という観衆が地元選手をワアワアと応援して、こっちの気勢をくじこうとする。それに比べると日本のお客さんはおとなしいものです。

佐考 世界記録ということを意識しはじめたのは、いつごろからのことですか。

笠谷 いや、ジャンプ競技には記録というのはないんですよ。あるのは成績だけで。そのとき、そのときの成績だけが残るわけです。しいていえば最長不倒記録というのがありまして、それは現在、一六九尺が世界記録になっています。転倒した場合でいようと一七〇尺を越えているんですよ。

斎藤 そういう記録は、まだまだ伸びるものでしようか。

笠谷 そうですね。前は一五〇尺が限界だと言われていたのが一六〇になり、一七〇に迫っているわけですからね。現在の一六九とぶときですと、滑降のスピードが時速一〇四~一〇五で、落下にかかるともっと速くなります。そのスピードにどこまで耐えうるかですね。

千葉 笠谷さんが挑戦しようとしているのはどのくらいの距離ですか。

笠谷 いや、ぼくは非常に臆病なほうですから、挑戦というのは、あんまりできないんです(笑い)。

大田 でも、世界選手権は意識されたでしょ。

笠谷 まったく考えてませんでした。

佐考 もしかしたら:とか(笑い)。

笠谷 (笑いながら)そりや、夢はありますよ。たとえば、だれか三億円くらいくれる人はいないかなあといった、そんな程度な

ら。ともかくオリンピックに出るくらいの人でしたらだれが優勝してもふしきはない

んです。その日にベストコンディションを出せた人が優勝するんです。

●みんなにささえられた札幌大会

千葉 笠谷さんは、コンディションづくりはどんなふうにしてらっしゃるんですか?

笠谷 その、コンディションづくりっていうのが、ぼくは苦手なんです。そこで、自分の最悪の条件のときに、どこまでやれるかを目安にして試合に臨むわけです。練習のときにはどうやって最高の条件にもつていかを考えますけれどね。試合のときは最悪の条件を目安にしていましたほうが、それなりの力を出せますし、かなりひどい成績であっても納得がいきますから。

大田 国際試合のときは外国選手のことを強く意識しませんか?

笠谷 話をしないで練習ぶりだけ見ているとものすごくうまく見えちゃって、どうも心理的にうまくありません。それで、なるべく強そうな人のところへさつさと行っちゃって、握手をして、ひとこと、ふたこと話して友達になってしまふんです。そうすると、もう圧迫感は受けなくなりますよ。

大田 たまたまかく元気でとべているということに感謝して、一生けんめいやるということです。

笠谷 まあ、どの試合にも勝ちたいですが、そうすると、ほかの人はだれも勝てなくなるわけで、そういうことはありえない(笑い)。

千葉 たまたまかく元気でとべているということに感謝して、一生けんめいやるということです。

笠谷 ただ、ぼくがオリンピック予選を一番で通過するようでは、日本のジャンプ陣もさびしいなという気はしますね。

一同 どうもありがとうございました。

笠谷 強い印象というのは、みんな失敗した印象ばかりですね。勝ったときだって終つてみれば反省、反省で、皆さんのが思われ

てるようなものじゃないんです。周囲のかたから見ての華やかな結果というのも、当人にとっては必ずしも華やかなだけではない。まあ、練習によつてそこまではやれたという自信だけは残りますが。

千葉 札幌オリンピックの結果についてもどうなんですか?

笠原 そうですね。(考えながら)札幌でどうして勝てたか自分なりに分析してみると皆さんに場を与えていたいたという感謝の気持ちだけが残つて、自分というものは、くやしいほど出できません。

大田 すると、今年からの目標は?

笠谷 まあ、どの試合にも勝ちたいですが、そうすると、ほかの人はだれも勝てなくなるわけで、そういうことはありえない(笑い)。

